第40回 特別対談企画

出会いは始まり。人に会えば そこからすべてが開ける。

デザイナー
コシノジュンコ 氏

フランスで開かれる「パリコレクション」で1978年から22年間にわたって活躍し、日本を代表するファッションデザイナーとして今なおその名が世界に知られるほか、2017年に文化功労者顕彰、2021年にはフランス政府よりレジオン・ドヌール勲章受章の栄誉に浴しているコシノジュンコさん。昨年冬に上梓された著作『コシノジュンコ 56の大丈夫』に綴られた、逆境を乗り越えるための至言の数々に感銘を受け、今回、対談をお願いしました。

ファッション、芸術の世界的な中心地である花の都パリへ乗り込み、時代をリードする最先端の流行を生み続けることは並大抵ではなかったはずです。ファッションを通じた国際的な文化交流にも尽力し、日本のソフトパワーの拡大にも貢献されているコシノさんは、世界の空気を知る人物でもあります。

コロナ禍で時代が大きく変化する節目にある今、アフターコロナを見据えてわれわれ経営者は何をすべきか、心がけるべきことは何か、対談を通じて聞きました。当意即妙の受け答えから得られたキーワードや人生訓の数々を、参考にしていただければ幸いです。

コロナ後に新時代が訪れる

畠 収束はまだまだ見えておりませんが、経営者にはコロナ後を読んで、布石を打っておく責任があります。コロナ後の経済下で企業経営をどうデザインしていくかを本日はコシノさんと一緒に考えていければと思っております。

コシノ 14世紀にヨーロッパで黒死病（ペスト）が猛威を振るいましたが、ペストによるパンデミックが収束に向かうのと並行して、イタリア半島でルネサンスが始まりました。現代においても、コロナ禍が終わった後に新しい文化、政治、経済が始まる可能性があると考えます。

畠 ペストに対し、中世社会を支配していた教会は無力だったと聞きます。宗教が力を失うのと反比例するように、学問・芸術に自由な気風が生まれたのでしょうね。

コシノ もし、コロナが完全に収束したとしても、コロナ前と同じやり方が通用するとは限りません。伝統や過去の実績は確かに大切ですが、これらにこだわらない柔軟な姿勢や考え方が今後、求められるのではないでしょうか。

畠 オミクロン株など、次々と新しいタイプのコロナウイルスが発生しており、コロナのまん延が終わるのは、もしかしたらずっと先になる可能性もあります。

コシノ 「コロナ禍だから何もできない」とあきらめるのではなく、こういう時期だからこそできることがあるはずだと発想を転換できる人が「勝ち」なのだと思います。コロナによる活動の制限で時間の使い方にはまだまだ工夫の余地があります。これをどういう風にデザインしていくか、有効利用していくかを今は考えていくべきでしょう。ちなみに私は、仕事の中でためてきた言葉や思いを整理して、昨年2月に本を出しました。

畠 『コシノジュンコ 56の大丈夫』ですね。

コシノ そうです。

畠 もしかして〝56〟というのは…。

コシノ そう、語呂(ごろ)です。もちろん、56のテーマを掲載していることも意味しています。

畠 となると〝大丈夫〟にも何か意味がありそうですね。

コシノ 〝大丈夫〟については文字通りです。三つの漢字をよく見ていただくと、人という字がそれぞれにありますよね。「人、人、人」。

畠 人が3人集まっているようにも見えます。

コシノ 漢字はよくできた文字で、一人（大）から始めて、そしてみんなで支え合う。大丈夫という漢字からは、そんなことが読み取れます。

母親は朝ドラヒロインのモデル

畠 もう10年前になりますか。NHKの朝ドラの「カーネーション」をよく見ていました。コシノさんのお母さんの小篠綾子さんをモデルにしたドラマでした。放送当時、お母さんはまだご存命だったのですか。

コシノ いえ、亡くなっていました。存命の人間をモデルすることは宣伝にもなってしまうので、ないそうです。ドラマの中で母は糸子という名前でしたね。戦後は、男手が足りず、どの家でも女性が仕事に家事に頑張る時代でした。父が戦争で亡くなり、母は洋裁店を営みながら、私たち3姉妹を育ててくれました。

畠 おじいさんは呉服店のご主人だったとか。

コシノ そうです。母は祖父に反発して洋装、洋裁の道に進みました。衣服が和服から洋装主体へと移り変わる時代でもあり、母にとっては楽しい仕事だったのではないでしょうか。でも、母が通わせていた私たちの習い事は、日本舞踊、三味線、長唄、お茶、お花など、全て日本的なものばかり。

畠 お母さんなりに、意図があったのでしょうね。

コシノ 子どもの頃から和のセンスや知識を磨いた経験は、能や歌舞伎といった伝統芸能に関わるときなど、後年になってとても役立ちました。日本の伝統を知っているということは、私にとって大きな宝です。

畠 なるほど。

コシノ ただ、習い事には行っていましたが、母は「これをしなさい、あれをやりなさい」と強制するような教育方針ではなく、放任に近かったですね。

畠 お家が洋裁店ということで、早いうちからファッションの世界に入りたいと考えていたのですか？

コシノ 親の背中を見て育っていますので、ものづくりの面白さは子どもの頃から理解していました。洋服の作り方も、教えてもらったわけではありませんが、よく「見習う」というように、見て覚えました。でも、私自身は画家になりたかったんです。

画家志望からデザイナーへ

畠 ほお。油絵ですか、日本画ですか。

コシノ 油絵です。美大に行きたくて一生懸命勉強していたのですが、高校2年のときにある先生から、「どうして、お母さんと同じ方向の道に進まないの」と私の絵を見ながら不思議がられました。実はあまり嬉しくなくて、「えー、そうかなぁ」とがっくりしました。

畠 そこで進路を軌道修正したんですね。

コシノ 振り返ると、そこから今につながる私の戦いが始まった感じです。東京にある服飾学校に進学し、在学中に新人デザイナーの登竜門に位置づけられる装苑賞を19歳で受賞しました。

畠 まだ10代で。すごいですね。

コシノ 絵心があってデッサンができ、前の住友銀行在籍中に、気鋭のファッションデザイナーとして売り出し中だったコシノさんに、プライベートな依頼をしてきたとは驚きです。

コシノ 当時はお名前も知らない、まったく面識のない人でした。でも、思ったらやる、ためらわない、私のようなテレビの向こう側にいるような人間にも臆せずアプローチしてくる度胸に驚きましたし、そういった方は共通して遊び心を持っているなと私は感じています。

家業が洋裁なので縫製の知識も経験もあったことが奏功したのだと思います。19歳での受賞はいまも最年少記録のままです。同級生には高田賢三さんもいて、環境にも恵まれていましたね。自分の人生を振り返ると、いい人との出会い、巡り合いがありました。出会いはまさに運ですが、一方、運も実力のうちとも言います。

畠 築いた人脈から新しい出会いがあり、そこから仕事が生まれることもありますよね。

コシノ 自分の人脈の外から突然、出会いのきっかけが舞い込むこともあります。ちょっと古いエピソードですが、のちにアサヒビールの社長、会長を務められる樋口廣太郎さんが住友銀行の副頭取だった頃に、住友銀行の青山支店から直接、私宛てに電話がありました。私の自宅を見せてほしいと。私ではなく、家です（笑）。

畠 おそらくご本人がテレビか何かでご覧になったのでしょうね。でも、すごい好奇心というか積極性ですね。樋口さんと言えば「スーパードライ」の成功で知られていますが、アサヒビール転籍

経験に裏打ちされた感性を

畠 コシノさんご自身は、ファッションデザイナーとして成功できた理由をどう分析されていますか。デザインセンスや感性とは別のところで。

コシノ 時代に乗るということができたからだと思います。一度時代に乗ると、世間はその人物を忘れません。

畠 時代に乗るといっても簡単ではないでしょう。チャンスをものにする負けん気や運を引き込む力があったからだと想像します。

畠経営グループ　会長　畠 善昭

デザイナー　コシノジュンコ 氏

ファッションデザイナーの登竜門「装苑賞」を最年少で受賞。1978年から22年間パリコレクションに参加。以降、NY（メトロポリタン美術館）、北京、キューバ、ロシア、スペインなどでショーを開催しファッションを通じた国際的な文化交流に力を入れる。オペラ『魔笛』や『蝶々夫人』、ブロードウェイミュージカル『太平洋序曲』（トニー賞ノミネート）、DRUM TAOの舞台衣装をはじめ、花火のデザインや国内被災地への復興支援活動も行っている。VISIT JAPAN大使、2025年大阪・関西万博シニアアドバイザー、文化庁「日本博」企画委員。2017年文化功労者顕彰、2021年フランス政府よりレジオン・ドヌール勲章を受章。ほかイタリア文化功労勲章・カヴァリエーレ章、モンブラン国際文化賞、キューバ共和国友好勲章。2019年8月、日本経済新聞『私の履歴書』掲載。毎週日曜17時～TBSラジオ『コシノジュンコMASACA』放送中。

コシノ 負けん気というより、常にチャンスをつかむためのチャンネルを前方に開いていたというか、やる気ですね。何か仕事のお話があったら、必ず乗ります。躊躇せず。

畠 勇気がいりますね。

コシノ やったことのないこと、初めてのことにものすごく興味がわきます。逆に前と同じことの繰り返しは退屈しますし、生きていて意味ないなと思ったりします。誰もがやったことがないことに挑戦できるのは、ある意味ぜい沢で、ドキドキしますね。

畠 日本はいろんなモノにあふれた豊かな社会ですが、コロナ後はモノや商品が有する単純な機能より、デザインやネーミング、パッケージといった点が商品開発や差別化においてより重要になってくるのではないかと思っています。

コシノ 人はね、やはり目で判断します。ぱっと見て、ピンと来るかどうか。いいモノはトータルでいいですから。

畠 コロナ後の時代に乗ってビジネスを成功させるには、いいモノを嗅ぎ分ける、もしくは作れるフィーリングとか感性、センスが重要になってきそうですね。

コシノ 根拠のない何となくのセンスや感覚に頼るのではなく、いろんなことを知った上で「これは」と思えることが大変重要です。いろんな経験や知識を積み上げた中から選りすぐりをチョイスできないと、本物を発見できません。

畠 なるほど。経験や知識に裏打ちされた判断がないと、競争には勝てないということですね。

コシノ 経験という土台があってはじめて、〝高い感性〟と言えますよね。若いときにたくさんいろんなものを見て、体験しておけば、いつかそれが役に立つ場面に遭遇します。私も子どもの頃の習い事が大人になって生きました。そして、チャンスやチャレンジのときに自分の持てる能力や経験値を存分に発揮できれば、ビカイチになれます。

チャレンジは失敗を恐れず

畠 ちょっと変なことをお聞きします。もし生まれ変わっても、やはりデザイナーになりますか？

コシノ うーん、どうでしょう。時代とともに常に新しい職種が生まれてくるから、今と同じクリエーティブな範疇に収まる仕事を選ぶと思いますが、同じ繰り返しはしないかもしれない。

畠 デザイナーというのは、経営者の要素が大きいように思います。

コシノ 私の肩書は、「ファッションデザイナー」でなくていいと思っています。ファッションと付ション以外のデザインの仕事をしても公平な評価をいただけないケースがあります。

畠 今は、ファッション以外のことを幅広くされているということですね。

コシノ えええ。コロナ禍で海外へ自由に行けなくなっていることも手伝って、ここ数年は絵を数多く描いたり、オブジェを制作したりしています。先ほどご紹介いただいた本の執筆もそうですね。絵も集中すれば、たくさん描けますし、一生懸命取り組めばプロだって夢ではありません。

畠 それは何でも当てはまりますよね。

コシノ やるからには、あいまいは駄目。徹底的にやることです。

畠 今年4月15日から5月29日まで、大分県立美術館で「原点から現点」と題した企画展を開催するそうですね。コシノさんの高校時代から現在までの活動の全貌を紹介するとか。「原点から現点」というコピーもいいですね。

コシノ ふっと思いついた文言ですが、私が考えました。

畠 コシノさんのクリエーターとしての集大成であることを広くお伝えするのに、いい表現かなと思います。

コシノ 「やってみなはれ」という挑戦を後押しする言葉があります。ご存知ですか？

畠 どちらも関西人ですが、サントリーの創業者である鳥井信治郎さん、鳥井さんを尊敬したパナソニック創業者の松下幸之助さんが共によく使われていた言葉だったかと思います。

コシノ とにかくやってみる、チャレンジしてみるということが何事にも大切かなと思います。失敗を恐れたら何もできなくなりますし、失敗は決して避けるべきことではありません。

畠 失敗は成功の母。失敗から学べることも多いですからね。

コシノ 成功するまでやり続ければ、その過程での失敗は失敗と認識されなくなります。やはり、「継続は力なり」ですね。その点は経営においても同じでしょう。時代に沿って、時代に合わせ、必要とされる商品やサービスを常に提供することが企業永続のポイントでしょう。

畠 言い換えれば、「易不易」ですよね。易は変わる、不易は変わらないという意味があります。俳諧の松尾芭蕉は「不易流行」という表現を用いていますが、継続すべきところ、時代に合う変化を求めて整理していくことも必要でしょう。

コシノ デザインの原点は、状況を俯瞰して整理すること、無駄なところ、ゴタゴタした箇所を間引いてクールに見せていくところに真髄があります。その点は企業経営と全く同じだと思います。

こだわり過ぎず、継続は柔軟に

畠 なるほど。最後に読者へのメッセージというか、コシノさんから経営者に向けた助言をお願いいたします。

コシノ そうですね。「こだわり過ぎない」「とりつかれない」ということでしょうか。継続は重要です。しかし、いつまでも同じことを執念深くやっていても、いつかは限界が来ます。そして、出会いを大切にすること。繰り返しになりますが、出会いは全ての始まりです。

畠 人との出会いを求め、それを自らターニングポイントにできるかどうかですね。コシノさんの今後ますますのご活躍を期待しております。本日はありがとうございました。

コシノ こちらこそ、ありがとうございました。